
茶の湯の空間と生活の豊かさの関係

～ほっこりできる空間～

第1章 プロジェクトの概要

1. プロジェクトの名称、目的

(1) プロジェクトの名称

茶の湯の空間と生活の豊かさの関係

(2) 目的

現代の生活空間は、実生活に基づいた豊かな空間であるが、一方で、私たちは時間に追われたせわしない日々を送っている。

そこで、私たちは、最小限の空間の中に豊かな広がりを感じられる茶の湯の「茶室空間」に目を向け、茶の湯の空間を検証したい。

また、生活の豊かさとは、ゆったりくつろげる余裕のある生活であると考え。そこで、「ほっこりできる空間」として茶室空間を取り上げ、茶の湯の空間とほっこりできる空間との関係を検証し、それに基づき、大学の中に「ほっこりできる空間」を提案したい。

2. 代表者及び構成員氏名等

・代表者：

仲島 聖子 家庭領域専攻 3回生

・構成員：

上野 光代 技術領域専攻 3回生

三宅 歩美 家庭領域専攻 3回生

3. 助言教員氏名

延原 理恵先生（家政科）

第2章 内容や実施経過

1. 内容

実際に「茶室」を見学し「茶室空間」を体

感したり、現代の建築を見学し「生活空間」を検証することを通して、自分たちなりの「現代風茶室空間」を藤陵祭で設置する。その時、来場者にアンケートの協力をいただき、茶室空間とほっこり空間の関係を検証する。また、その考察に基づいて大学の中に「ほっこりできる空間」を提案する。

2. 実地経過

7・8月 茶室の調査・選考

10月 国宝茶室「如庵」特別見学会に参加
名古屋城、博物館明治村見学

11月 茶室「啄庵」の設計
「第62回藤陵祭」学生企画参加

12月 アンケート集計・考察

1月 慶沢園見学
天王寺公園、海遊館見学

2月 佐川美術館楽吉佐衛門館見学
滋賀県立大学の見学
ほっこりできる空間の検証

第3章 結果や成果

1. 「茶室」の調査・選考

茶の湯を行う部屋は茶室、それに付随する庭は露地と呼ばれる。日本建築の発展の途上で茶の湯の目的のために作り出された茶室には設計者でもある茶人の茶の湯観が反映されている。まずは、茶室についてインターネット、茶道関連本を用いて調査を行った。

その後、私たちは主客の距離を最大限まで縮めた極小の空間で作られた茶室の内部に入って見て違和感や圧迫感を覚えないのか体験してみたくなり、実際に見学する茶室の選考を行った。

(1) 茶室の調査

「茶室」という言葉は、近代になって広まった呼称である。茶の湯草創期の室町時代では「座敷」と呼ばれてあり、このころから床に畳が敷き詰められるようになった。その後、

千利休が数寄屋造りの茶室を始めて作った。

室町前期の茶人村田珠光の時代、唐物所有者の茶座敷は六畳で四畳半は唐物道具のない侘び数寄者のために存在したが、室町後期の茶人武野紹鷗のころには四畳半の茶室は唐物所有者の茶座敷となった。安土桃山時代には二畳半・三畳の小間が全盛期を迎えた。

千利休は亭主と客の「直心の交わり」を求め、主客の距離を最大限まで縮めて極小の空間を作った。

・破損のため見学不可



(「菅田庵」の間取り図)

(2) 見学する茶室の選考

茶室選考の基準をできるだけ小さな空間で構成された茶室に定め、この基準によって、以下の3つの「茶室」を選び詳しく調査をし、見学する茶室を決めることにした。

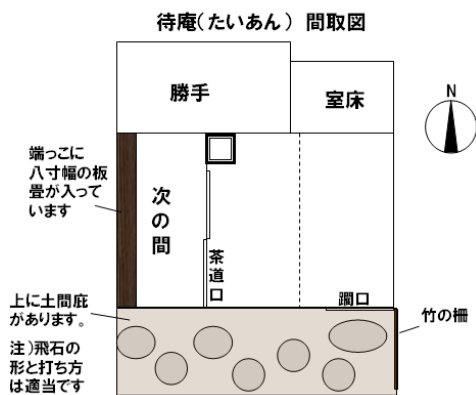
iii) 「如庵」

- ・二畳台目
- ・愛知県犬山市御門先 有楽苑
- ・国宝茶室三名席のひとつ
- ・織田有楽斎作

i) 「待庵」

- ・二畳

以上より、「如庵」を見学することにした。「如庵」の作者織田有楽斎は「二畳半、一畳半は客を苦しめるに似たり」と言い切った。それが「如庵」にどのように反映されているのか実際に空間を体験したいと思った。



(「待庵」の間取り図)

2. 国宝茶室「如庵」の見学

- ・京都府大山崎町 妙喜庵
- ・国宝茶室三名席のひとつ
- ・千利休作
- ・茶室内の見学不可



(「如庵」の外観)

ii) 「菅田庵」

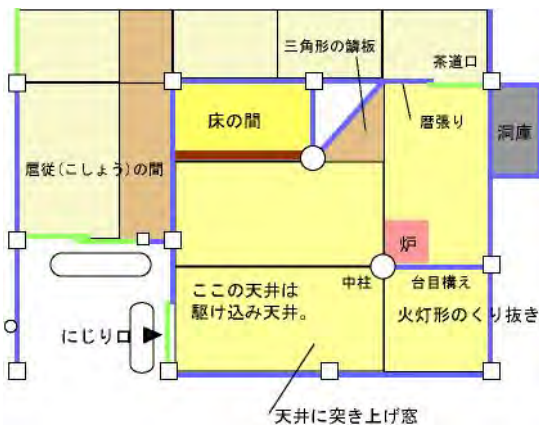
- ・一畳台目 (台目 = 3/4 畳、つまり 1.75 畳)
- ・日本最小の茶室
- ・島根県松江市菅田町
- ・松平不味作

10月16日(土)に愛知県犬山市にある国宝茶室「如庵」特別見学会に参加した。「如庵」という名称は、庵主織田有楽斎のクリスチャンネーム「Joan」または「Johan」からつけ

られたという。

「如庵」は、二畳台目向切で、台目下座床を設けており、全体でおよそ4畳半の広さである。

最大の特徴は点前座の炉先に中柱を建てて板をはめ、火灯形にくりぬいて点前座に明かりを集中させるとともに、空間を引き締めた点である。床脇には三角形の鱗板を入れて壁面を斜めにし、茶道口から客座への動きをスムーズにしている。



（「如庵」の間取り図）

また、点前座脇壁にある2つの窓は、竹の連子を詰め打ちにしたもので「有楽窓」という。そのため「如庵」には、「有楽囲」、「筋違いの数寄屋」、「袴腰の数寄屋」という別名がある。さらに、腰張りに古暦が張られていることから「暦張りの席」とも呼ばれている。

一般に、中柱は台目構えのために建てるが、ここでは火灯形にくりぬいた板をはめる独創的な工夫がある。向切の点前座を引き立てるとともに、板で隔てた半畳は席中のゆとりとなる。勝手口にある有楽窓の竹のスリットから入る光により、雨の日などは回折現象のような効果で虹の陰影が見られるようである。

「如庵」を見学し、狭い空間をできるだけ広く見せ、客にくつろいでもらう工夫は、以下に挙げる2点だと考える。

①鱗板を設置し、無駄のない茶室空間にしたこと。

②中柱、有楽窓に見られるように、光をうまく取り入れた茶室空間にしたこと。

3. 茶室「啄庵」について

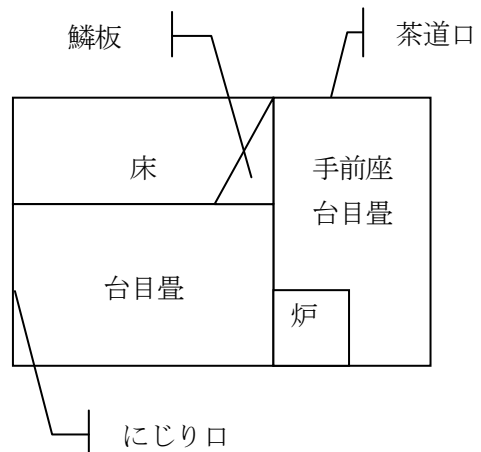
(1) 設計と設営

第62回藤陵祭に学生企画として参加し、1号館C棟ロビーに一畳半の「茶室」を出現させようと考えた。「茶室」の名前「啄庵」の由来は、京都教育大学のマスコットキャラクター「そったくん」の名前の由来である「卒啄同時」から一字もらった。

「啄庵」は、台目の畳を2枚使ったため一畳半になり、これは千利休の茶室である「待庵」よりも狭い空間である。しかし、その狭さから圧迫感を憶えないように「如庵」見学から得た2つの工夫を盛り込んである。

①無駄のない茶室空間

私たちは、茶道経験者であるため、設計した「啄庵」で実際に茶席を設けるとどうなるのかをシミュレーションし、茶室を設計した。今回は、鱗板を設置したほか、茶道口、にじり口、床の位置も考えて設計した。



（「啄庵」の間取り図）

②光をうまく取り入れた茶室空間

最初、床以外の壁は作らず開放した茶室を設計したが、実際入ってみると、壁のない部屋というのは開放感を通り越して常に誰かに

見られているようで気持ち悪いことがわかった。そこで、麻紐を網のように使い、三方の壁を覆ってみた。

これは、そったくんが鳥をイメージしたキャラクターであることもあり、鳥の巣をイメージしたデザインになった。こうすると、見られているような気持ち悪さはなくなり、また壁があるような圧迫感を感じることもなく居心地よい空間になったと思う。



(麻紐で壁を覆う)

また、今回は現代の「茶室」としてパイプ、プラスチックダンボール、石、ブロックなどを使って「茶室」をデザインした。伝統と現代が混ざりあった「現代茶室」が演出できたと感じている。



(近代的な素材を使用)

(2) 茶室「啄庵」アンケート

i) 集計結果

藤陵祭期間中、茶室「啄庵」を訪れてくださった方にアンケート調査を行った。アンケー

ト内容と結果は参考資料として末尾に載せておく。

ii) 考察

考察① 茶室と見られるには、にじり口と茶道具があるかが大きく関わっている。

質問6より啄庵が茶室に見えるという意見が50%しかなかった。質問5で茶室の要素はと問うと、1位は、にじり口・茶道具であった。また、質問7で茶室見える理由ににじり口があるからと挙げた人がいた。

今回、「啄庵」には、畳、床、にじり口しか設置しておらず、にじり口と同じく1位になっている茶道具がなかったため茶室に見られなかったと思われる。

考察② 茶室と見られる決め手に、素材は関係しない。近代的な素材を用いることに肯定的である。

質問7で近代的な素材を用いた茶室についてきたところ、肯定的な意見が多かった。

しかし、近代的な素材の取り入れ方をもっと工夫すべきであるという意見や、近代的な素材だけでなく、自然素材も組み合わせるとよいという意見が寄せられた。

考察③ 空間が広ければ広いほど、ゆったりできる空間になるとは限らない。また、すべての人が茶室でゆったりできるわけではない。

質問1、3より一畳半の狭い空間が広いと感じた人は、ほぼ100%であったのに対し、質問4で「啄庵」の中でゆったり過ごせそうかどうかを問うと、できないと答えた人が、50%となった。これにより、空間が広ければ広いほど、ゆったりできる空間になるとは限らないということが分かった。また、すべての人が茶室でゆったりできるわけではないことも分かった。

考察④ ゆったり・ほっこりするための条件は個人差があり、ゆったり・ほっこりするための条件とは、好きな場所で好きなことをし、他人の目を気にすることなく、自分の世界に浸っているときである。

質問8で、全員が近頃のんびりと過ごす時間があると答えた。そのうちほとんどの人がその時間を意図的につくっていることが分かった。これらのことから現代人は時間に追われており、自ら時間を捻出しなければのんびりと過ごす時間が確保できないのではないかと考えた。

質問9において、ゆったりできる場所については、自宅やその中でも特定の場所、海、お気に入りのカフェなどが挙げられた。何をしているときについてはお茶を飲んでいるとき、座っているときなど、活動的な行動を起こしているときではなく、静かに時を過ごしているときにゆったりしているという意見が寄せられた。このことから、ゆったり・ほっこりするための条件は個人差があることが分かった。

また、質問4で「啄庵」の中でゆったりと過ごすことができない人が50%だったが、これは今回の藤陵祭での出店において人通りが多いところに設置し、周りからの視線が気になったことも結果に反映されていると思われる。

以上のことを踏まえると、ゆったり・ほっこりするための条件とは、好きな場所で好きなことをし、他人の目を気にすることなく、自分の世界に浸っているときにゆったりと感じるのではないかと考えた。

(3) 反省と感想

少ない時間の中で、茶室「啄庵」が形になったことは満足している。何もないところに、一から茶室空間を作り出すのは大変だった。人が入る以上は、簡単に倒れるものであってはいけなかったので安全性を重視した。近代的な

素材は釘で簡単に固定することもできず、とても苦勞した。藤陵祭期間中、「啄庵」を見に来てくれた人がいたことはとてもうれしかった。

「啄庵」の製作中に人の目が気にならないようにと麻紐で目隠しをするという改善作をとったが、アンケートより、それでも居心地の悪さを感じる人がいたのは残念である。周りの風景に、実際の竹をいくつか使用する予定でいたが、雨がふっていたため、今回は竹を模した緑色の模造紙を使用したことと、外からも見えるように開放的な設置方法をとったため殺風景で、また人からへんに見られているような気持ちになったのだと思う。

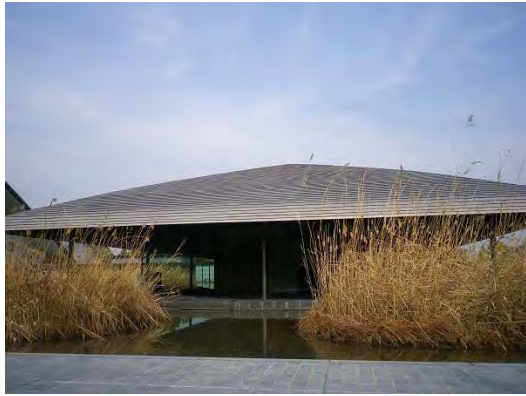
また、企画当初は演出のために茶道具も設置しようと考えていたが、藤陵祭には子どもも多く来場するため、安全面を考慮し、設置しなかった。しかし、アンケートより、茶室に見えるには茶道具の影響も大きかったと知り、展示物の見せ方や演出も大切であることがわかった。

今回、アンケートの中でいくつか指摘されていたように実際林の中に「啄庵」が建っていたとすると、雨の問題、寒さ暑さの問題など茶室として使うにはたくさんの課題があると感じている。また、近代的な素材を使うことは、とても面白く需要もあるが、もう少し工夫をして見せる茶室を作らなければならぬと感じた。

4. 「樂吉左衛門館」の見学

2月6日(日)滋賀県守山市にある佐川美術館樂吉左家門館の茶室見学会に参加した。樂吉左衛門は、千家十職にはいつている陶芸家で、この茶室を創案したのは、当十五代の樂吉左衛門である。

この茶室は、地下に存在する。地上は、湖となっているので水没しているということになる。



(広間の外観)

また、コンクリートの打ちっぱなしという近代的な素材を使用した茶室である。

入口は現代らしく自動ドアであった。路地は手前からだんだん幅が狭くなっていき、実際よりも長く見えるよう、遠近法をつかって空間を操作していた。腰掛待合には、地下であるという高低差を利用し、滝が作られていたが、これがオブジェのようでもあり、近代的な雰囲気をかもし出していた。小間は、竹や和紙が使われていた。壁は和紙で覆われており、光を取り入れる工夫となっている。しかし、床は、コンクリートで塗られており、伝統と現代の調和がとても美しかった。

地下なので明かりは基本電気であるが、水による光の反射や天窓を取り入れ、最大限に光を入れる工夫をしていた。



(水を利用して光を取り入れる)

地下に水没しているのはここまでで、階段を上がり、広間にはいると水面の景色が広が

っている。ここにも空間を広く見せる工夫があり、特殊な窓ガラスがはめられているので透明すぎて壁がないように見える。また、柱を使わず、ほとんどのものを上から釣る構造をとっていたため空間がすっきりして見えた。

この茶室を見学し、茶室空間をできるだけ広く見せる工夫は、以下に挙げる2点だと考えた。

①光をよりたくさん取り入れるために、水を利用したこと。

②従来の決まった規格や茶室の常識にとらわれず、人の心理に合わせた空間の取り方をしたこと。

第4章 まとめや反省、今後の展望

1. まとめ

(1) 茶室とほっこり空間

狭い茶室空間で、客にくつろいでもらう工夫は、以下に挙げる3点だと考えた。

①無駄のない空間にすること。

②光をうまく取り広さを演出すること。

③常識にとらわれず、人の心理に合わせた空間の取り方をすること。

しかし、私たちは大切なことを忘れていた。「茶室」は、茶事の主催者(亭主)が客を招き、茶を出してもてなすために造られる施設である。狭い空間を広くみせるような工夫があるだけの茶室であったならば、ほっこり空間とは言えないだろう。

千利休は亭主と客の「直心の交わり」を求め、主客の距離を最大限まで縮めて極小の空間を作った。おもてなしの心、相客を思いやる心、そういった心があるからこそ、茶室がほっこり空間であると言えるのではないかと考える。

(2) 現代の「ほっこりできる空間」

私たちにとっての「ほっこりできる空間」は茶室だったため、茶室にほっこりする条件

が隠されていると思い研究を始めた。

しかし、茶室「啄庵」アンケート結果より、すべての人が茶室に入れば無条件にほっこりできるわけではなく、「ほっこりできる空間」は、十人十色で10人いれば10ヶ所の「ほっこりできる空間」が存在することがわかった。また、その場所で常にほっこりできるとは限らず、その時の状況やその人の状態でも変化するのではないだろうか。そこで、「ほっこりできる空間」とは、自分で見つけるものであり、第三者が一方向的に提供するものではないと考えた。

以上のことから、「ほっこりできる空間」の条件とは、その人にとって好きな場所であり、その人が自分の世界に没頭できる、つまりそれだけ集中できる空間であることと考える。そのため、「ほっこりできる空間」は人の数だけ存在し、自分で自分に合った空間を見つけたり、創造したりして、ゆったりとくつろぐ時間を持つことが豊かな生活を送るために大切であると結論付ける。

2. 反省

藤陵祭への企画出店は、時間の無い中、まずまずの茶室が設営できたと感じているが、期間中に展示場所にずっといることができず、案内や説明等をしなかったため、アンケートの回収率が悪かった。

また、メンバー全員が3回生であったこと、同じ部活動をしていたことも災いして6月、9月が教育実習のため、10月は部活動行事のため活動できず、後半に詰め込んで研究することになってしまった。

振り返ってみると、普段遠くて行けない場所や、一人では入ることのできない茶室内や建築物を見学でき、大変勉強になった。プロジェクトは思うような結果が得られず、先に進まなかったり、メンバー内で意見が割れて1日中議論をしていたりと苦労もたくさんあ

ったが、とても楽しく、有意義なものとなった。

3. 今後の展望

今回の研究で、ほっこり空間には、空間とほっこりという物理的な関係だけではなく、人間の心理とほっこりという心理的な関係もあることが分かった。

今回は、物理的な関係に注目し、ほっこり空間を検証してきたので、次は、心理的な関係について深めてみたいと思う。

また、機会があれば、改善した現代風茶室「啄庵」の設計もしてみたい。

<参考・引用文献>

- ・「“しくみ”で解く茶室」（チルチンびと建築叢書）竹内 亨 著
- ・有楽苑パンフレット
- ・楽吉佐衛門館茶室パンフレット
- ・「茶の湯の空間とはなにか 成り立ちと構成」（彰国社、1995）福良宗弘 著
- ・京都新聞 文化「アートにはない五感の楽しみ」（2010/10/14）

※参考資料

茶室「啄庵」についてのアンケート集計結果

質問項目	狭く感じた	普通	広く感じた	意見など
質問1：茶室「啄庵」に入ってみて、広さについてどのように感じましたか。	17	0	83	・壁がないから。 (多数意見)
質問2：「啄庵」は一客一亭の茶室として考えています。二人中に入ると考えたとき、広さについてどのように思いますか。	17	66	17	
質問3：「啄庵」は見た目と比べ、中の広さはどのように感じましたか。	0	0	100	
質問項目	できそう	どちらとも言えない	できなさそう	意見など
質問4：「啄庵」中でゆっくりと時を過ごすことができそうですか。	33	17	50	
質問5：何があると茶室だと感じることができますか。	1位 3位 4位 5位 6位	にじり口・茶道具 水屋 畳 炉 床		
質問項目	感じる	どちらとも言えない	感じない	意見など
質問6：「啄庵」は茶室だと感じますか。	50	33	17	
質問項目	肯定的意見	否定的意見	意見など	
質問7：今回「啄庵」を創るにあたり、木や竹などの伝統的な素材でなく、パイプやプラスチック段ボールなどの近代的なものを使用しました。このことについてどう思われますか。	83	17	<ul style="list-style-type: none"> ・同時に自然素材も取り入れるとより趣があった。 ・使用しても良いが、表に見えない方が良い。 ・廃材の寄せ集めに見えた。 	

質問項目	ある	
質問8：あなた自身、近頃のんびりと過ごすことはありましたか。	100% (そのうち意図的であるのは80%)	
質問項目	場所	活動
質問9：あなた自身、どこにいるとき・何をしているときにゆったりと感じますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・家 ・お気に入りの場所 	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼーとしているとき ・すわっているとき ・趣味の時間
その他の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・現代社会のせわしさの中で心がホッとする時間を持つことが日々を健康的に送るためにはとても大切なこと。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・茶室には「おちつける」要素が必要な気がする。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・試み自体は面白い。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・実際にお茶を頂けたらよりイメージも広がったと思う。 	